



南三陸 まなびの女子会

活動報告書



南三陸 まなびの女子会とは

2014年春 震災から10年が経過した
中越地震の被災地からのまなびをもとに、
自分達のまち、南三陸の未来を考えていこうと
ウイメンズアイの声かけで集まった
まちの女性達による活動です。



まなびの女子会

まなびのスタイル
見て、
聞いて、
みんなで話して、
自分とみんなに
役立ちます。
持ちかえります。

南三陸 まなびの女子会 活動報告書

2015年3月 発行

発行/特定非営利活動法人ウイメンズアイ

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字大網218-1コンテナおおみ

●特定非営利活動法人ウイメンズアイとは
東日本大震災の災害ボランティア有志で2011年6月にその前身である
任意団体RQ被災地女性支援センターを立ち上げて以来、主に南三陸
町、気仙沼市、登米市で活動しているNPO法人(2013年6月法人化)
です。私達は、くらしの課題や弱者に敏感なまなごしを持つ女性達が、
みずからいかし元気に活躍できること目指して活動しています。

はじまりのはじまり



2014年春 震災から3年目に入り、被災地の復興への歩みは
そこに暮らす住民ひとりひとりの状況に応じてだんだんと枝分かれしていきま
地域としてどのように復興していくのか、これから町民として、
またその地域で活動するNPOとしてどんな関わりができるのか、
先を見通すことが難しくなっていました。

そんな時、過去の被災地から復興プロセスをまなぶ機会を得て、
南三陸町の女性達に、一緒にまなぼうと呼びかけました。
6月の初回の集まりは、再会の場となりました。

参加者からはそれぞれの被災体験からこれまでの生活が語られました。
「震災からまだ3年。まだ先のことを考えられる状況にない。」

「津波で大きな被害があった南三陸と元の場所に戻れた中越とは違う。」
また未来の話ができる段階ではないという想い。

一方で、震災後どんどん変わっていくまちに暮らしながら感じる危機感。
そんな参加者の不安を共有することから、

南三陸 まなびの女子会は誕生しました。

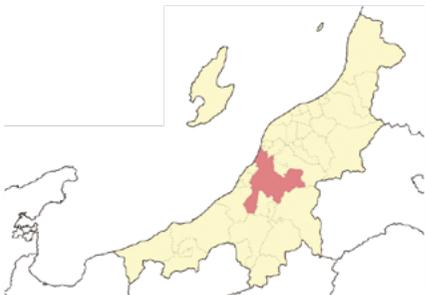
私達が訪問した10年後の被災地 新潟県長岡市

新潟県中越地震とは？

2004年10月23日午後5時56分頃に新潟県中越地方
で発生したマグニチュード6.8(気象庁)の地震。

崖崩れ、道路の寸断、家屋の倒壊などの甚大な被害を
もたらし、当時の山古志村の村民は全村避難を余儀なく
され、約3年間の長岡市内に設置された仮設住宅等で
避難生活を経て、村民の7割が帰村しました。

(2005年4月山古志村は長岡市に合併)



山古志地域の人口は？

	世帯数	人口	高齢化率	
震災前	平成16年10月	681件	2,168人	37.2%
現在	平成26年4月	458件	1,150人	47.7%

(参照元：山の暮らし再生機構山古志サテライト作成 配布資料)

もくじ	
南三陸 まなびの女子会とは	02
はじまりのはじまり	03
活動記録	04
中越視察	05
中越視察報告会	09
活動発表会	11

まなびの女子会 活動記録

当初、中越視察に参加した地域の婦人会役員や

南三陸町被災者生活支援センター支援員などが中心メンバーでしたが、視察訪問後はまちの復興や地域の課題に関心を持つ多世代の女性達が集まるオープンなまなびの場にひろがりしました。

2014年 6月7日(土)

● 初代会

7月16日(水)

● 中越視察事前説明会

7月28日(月)、29日(火)、30日(水)

● 中越視察(町内参加者6名、WEスタッフ3名)

8月6日(水)

● 中越視察の振り返り会

8月27日(水)

● 中越視察報告会準備1 報告内容まとめ

9月25日(水)

● 中越視察報告会準備2 掲示物作成

9月27日(土)

● 中越視察報告会

10月30日(木)

● 日帰りバス視察説明会

11月8日(土)

● 日帰りバス視察「大船渡・陸前高田市」(町内参加者12名、WEスタッフ3名)

11月29日(土)、12月16日(火)

● 日帰りバス視察の振り返り会

2015年 2月7日(土)

● ワークショップ 自分の暮らすまちのスーパーに「あったらいいな」こんな交流スペースを考える

2月28日(土)

● 活動発表会



まなびのたび 新潟県長岡市・小千谷市

中越視察

7月28日(月)

中越防災安全推進機構の山崎麻里子さんに現地コーディネートしていただき、中越地震以降の地域の女性達の取り組みを中心に三日間の視察をしました。



やまごし復興交流館 おらたる

震災の経験と山の暮らしを伝えるミュージアム

震災から9年を迎える2013年10月に完成したメモリアル施設を見学しました。「おらたる」は山古志の古い言葉で「私たちの場所」という意味。一階には診療所、隣は長岡市山古志支所と住民も立ちやすい場所になっていることに気づきました。写真やパネル展示を使った震災当時の説明はわかりやすく、「南三陸にも地形模型シアターが欲しい」という参加者の声がありました。



震災発生直後からの避難の様子を伝える大きな写真パネル。



震災の年の大晦日、仮設住宅暮らしの被災者がこのドラム缶について新年を迎えました。

手芸サークルかたくりの会

種彦原(たなすはら)集落に暮らす女性達の手芸サークル

震災前からの手芸仲間で支援を受け、「まけないぞう」タオルを作りました。今では錦鯉やアルパカの人形などの山古志のお土産品も製作、販売しています。一人で全部つくると製品に作り手の癖があるので、グループ内で工程を分担していることや、材料は布団の綿や白いワイシャツをリサイクルするなど手仕事の工夫も教えて頂きました。「無理しない、背伸びしない」ことで「作ることが生きがい」になっていることが伝わりました。



山古志を代表する錦鯉の手づくりストラップ。



前列中央がかたくりの会の女性達3名。

農家民宿「おつこの木」

地元のお母さん達のもてなしが最上級の宿

若栃(わかとち)集落は現在38世帯の小さな集落。*わかとち未来会議は、二度の地震で解体されることになってきた築160年の古民家を改修して、集落住民が運営する農家民宿を平成22年6月に開業しました。「震災から農地復旧に4年、村人に元気がなくなっていくのがわかり、仲間を募り未来会議を立ち上げました。最初は外の人を受け入れる余地がなかった地元の人も、たらかして(だまして)とにかくワークショップに参加してもらっているうちにだんだんと変わっていききました」と代表の細金さんが話してくれました。地場野菜を中心にした素材な料理の味と住民のおもてなしにみんな感動し、若い参加者からは「また休みに来たい」という声も。



夕食後、集まって下さった8名の集落の方と唄や踊りで夜遅くまで交流しました。

*若栃集落の村民有志と大学など外部の人と一緒に地域の未来を考えるネットワーク

7月29日(火)

木籠メモリアルパーク (郷見庵／木籠集落水没家屋)

地震の被害状況をさらに留める場所

河道閉塞により集落ごと水没した家屋が今も残るのが木籠集落です。私達はそこで震災遺構の保存意義について考えました。集団移転した集落の人が運営する直売所・資料館「郷見庵」では、軽トラに野菜を運び入れる元気な高齢者に出会いました。この集落には、集落を離れた人や集落外のファンと一緒に集落づくりを行う「木籠ふるさと会」があり、住民が減っても週末や地域のイベントには沢山の人が訪れることを代表の松井さんから伺いました。



震災語り部、木籠ふるさと会代表の松本さん。

農家レストラン 多菜田

虫亀(むしがめ) 集落の女性達が立ち上げた食堂

地元の女性達が自治体や区長さんなどの後押しを受けて、平成20年12月に郷土料理の食堂を開業しました。「帰村後、私達にできることはこの土地で元気に生きていくことだった」と代表の五十嵐さんが話してくれました。地域に受け継がれてきた味、腕を活かした料理はお客様さんに好評でお店は沢山の人で賑わっています。継続には、家族の理解があることが重要だと感じました。そして、「山古志の地に何らかの形で貢献したい」という気持ちが伝わりました。



震災後起業した経験のある参加者との熱心な意見交換。



代表の五十嵐なつ子さん。



創業時のスタッフで現在は良き相談役の長島定さん。

畑の学校

仮設住宅当時から菜園仲間の女性達の活動

長岡市内の仮設住宅時代に、敷地内に自分達で畑を作りあげ、売れる野菜を作りました。山古志に戻っても活動を続けています。農家にとって「米を買う」ということほど残念なことはなかった。それで、「土いじりがとても大事なだった」、「山古志に帰ってから生活に張合いがなかったらダメだった」と当時のことを語ってくれました。

限界集落と言われても気にしない、日々の営みを大事に暮らしている女性達はパワフル。シニアのみなさんも生き生きしていました。



毎日の畑仕事で焼けた肌はピカピカ、若々しく元気な70代の女性達。

7月30日(水)

仲子災害公営住宅とちお同住会

旧栃尾市にできた仮設住宅の入居者仲間設立した会

旧栃尾市仲子の公営住宅では、ストレッチャーが入る大きさのエレベーターや、ホールのベンチなど充実した設備を見学しました。

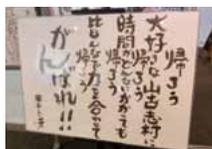
一方で、一人暮らし、二人暮らしの高齢者が多く、バラバラの集落から集まった入居者同士の交流の難しさ、使われていない集会所の現在の課題などを、とちお同住会の方に伺いました。雪かきボランティア受け入れが縁で、栃尾の祭りや畑仕事に年間800人の学生を現在も迎えています。また、同住会で能登半島沖地震や東日本大震災など被災地の支援を行っています。「仮設退居後もつながれる入居者の会をつくるのはいいね」と参加者の声がありました。



仲子災害公営住宅の建設に関わったとちお同住会代表の千野義夫さん。



震災当時長岡市内でパート勤めをしていた佐野さん。今は山古志では知らない人はいないという地域に欠かせない人。



当時の村長が掲げたスローガン「帰ろう山古志へ」。

多世代交流館になニーナ

子育て世代を中心に多世代・多分野・多地域の交流の場

被災した当時、8か月の赤ちゃんがいるママだった代表の佐竹さんは、小額の助成金で仮設住宅に暮らすシニアのお母さん達に料理を教えるというイベントを企画しました。習いに来た子連れの若いママ達から「ありがとう」と言われることで被災後支援を受けるばかりだったシニアのお母さん達が変わったそうです。

2007年に開設した多世代交流館では子連れのママがスタッフとして働きながら、子育てサロン、手しごとカフェ、健康お茶会、になりなどさまざまな会で多世代が繋がって行きました。参加者達も「子連れで仕事ができるなんて素晴らしい」、「子育て世代にとっては息抜き、高年齢者にとっては居場所、こんな場所がほしい！」と、共感していました。

※2014年6月交流館を閉鎖。団体活動は発展的に継続している。

震災から5年後、中越地震を体験したらママ達の視点から生まれた防災冊子。





視察先を紹介する手づくりのパネル。それぞれの感想を書いたいちじょうの葉で彩りました。

見て、聞いて、感じたことを
まちの女性達にシェア

NPO 法人多世代交流館「にこにこ」の代表佐竹直子さんをゲストに迎え、中越視察の報告会を開催しました。町内から多くの女性達が話を聞きに来てくれました。

第一部は、手づくりのパネルを使って視察先のことや、訪問先での出来事を視察参加者の言葉で紹介

お茶っこタイムは、南三陸の女性達の手づくりの漬物や茶菓手によるおもてなし。「こんな歓迎はじめてです！」と佐竹さんから感動の声が上がりました。その後の自

介しました。

第二部は佐竹さんより中越地震の被災体験から団体の立ち上げまでの経緯や多世代交流につながった食をテーマにした取り組みをお話していただきました。赤ちゃんや子どもの存在が多世代をつなぐきっかけになる、先輩世代の食の知恵が若い世代とつながるきっかけになるなど、人と人がつながるヒントをいただきました。



被災した当時赤ちゃんを背負って避難所を回り、母子支援を行ったことを話す佐竹さん。

中越視察 報告会

9月27日(土)
会場…南三陸町ポータルセンター



中越視察 参加者の声



佐藤ふく子さん

3日間も家を空けると仕事も炊事も迷惑をかけての参加となりました。でも、この機会に10年後の被災地がどのように変わったか興味があり、この目で見ておきたいと思いました。一番印象に残ったのは「おっこの木」という民宿です。そこで夕ご飯を食べながらのふれあいが一番よかったです。元気の良いおばあちゃん達、野菜料理が最高でした。



千葉ユミさん

震災後、自分のまちしか見てなかった時は「このまちに何か下んなきゃないのかな。何か下れるんだろうか」などと考えていたけれど、中越では地元のお母さん達が自分達の出来ることを無理なくしていたというのが印象的でした。



山内とも子さん

女性達のパワーが素晴らしい。年配者の経験が活かされていた。参加してよかったです。



小山里え子さん

被災した建物を震災遺構として保存するかどうかは意見がわかれていますよね。山古志では川がせき止められ家が土砂に埋まったままの場所を見ました。今のことだけでなく、これから何百年後にここに津波がきたことをどう継承していくのか？ 私は新潟に行っってその重要性を改めて感じました。



三浦夕さん

他の被災地は今までどうやってきたのかという事がすごく興味があったので、そのポイントで訪向できたことが良かったです。大きいところをぼんぼんとまわるだけではなく、自分達がそこで生活していたら必要となるころ、基本になる、参考になるところを絞ってみることができたと感じました。



東北大学大学院 社会学研究室専門研究員
本間照雄先生

今回の視察で出会った人々から次の3つの共通点をあげました。

- ① 地元が好き、自分達が暮らしてきた土地を大事にしている。
- ② 楽しむこと、苦勞も楽しみに変えている。その結果として、畑仕事やレストラン経営など自分達がやっていることのパワーになっている。
- ③ つながりをつくっている。一人ではなく、仲間ですべてやることが上手。女性のやり方は、生活に密着していてどれも具体的でわかりやすく、なにより背伸びしていない。このことは、持続可能性を持つという視点でも大切な取り組み方だと思います。視察に同行して、女性達の「食」をテーマにした話題は、こんなにも盛り上がり様々な話に広がっていくことに驚きました。



WE スタッフの活動後記

栗林美知子

この1年間この会に述べ100人の女性が参加してくれました。慣れない話し合いに参加してくれたことはまちの未来が少しでも良くあってほしいという想いを全員が共有していたからだと思います。中越の女性たちが教えてくれた「無理しない、でも諦めない」スタイルは活動を続ける中で私自身とても勇気づけられました。

河崎清美

訪問する前は三陸沿岸と中越では状況が違うので、参考にするのは難しいだろうという意見が多かったけれど、実際に現場で実践されている方々と会ってお話すると、勇気づけられるところも多かったようです。中越での実践が三陸での経験と具体的に結びついてきたように思いました。

石本めぐみ

1年間話し合ってきたのは、まちの女性たちが等身大で考えるまちの課題と理想のコミュニティの姿でした。まなびの女子会は、ちょっと本気のまなびの場。いくつになっても女の人たちがまなび意見し合える場がまちのなかにもあり続けることが大事ですね。



特定非営利活動法人

ウィメンズアイ

この報告書はトヨタ財団2013年度国内助成プログラム東日本大震災特定課題「復興まちづくりまなびのたび ― 女性のネットワークを活かすために」により作成いたしました。(2015年3月発行)